

# 木蓮



mikatuki98

眠たい眼をこすりながら部屋の窓を開けると、庭に一糸纏わぬ女性の姿あった。

僕は息をのみ、もう一度確かめるように女性の姿を見た。

「……なんて美しい肌なんだ」

朝日に照らされ、女性の素肌が一段と輝いて見える。

しかし女性は後姿だったので顔が見えない。

「……でも、どうして服を着ていないのだろうか？」

僕は女性の正体を知りたくなり、パジャマ姿のまま庭に出て行った。

ところが女性の姿は何処にも無い。

「確か、この辺りだったんだが……」

残念なような、良かったような、僕は複雑な思いのまま部屋に戻った。

「……あんな姿でこんな場所に立って居ること事態、有り得ないことだもんな」

今日は仕事で人と会う約束だからと、僕は一張羅のスーツを着込み、

居ないとは思ったが、部屋を出る前にもう一度だけ窓から庭を覗いてみた。

「あっ！？ あれは…… 昨夜、大屋さんが名前を教えてくれた花……」

僕はこの時、花の妖精が本当に居るんだ、と心から思えた。

その夜、僕は木蓮の木の下で眠っている夢を見た。

月明かりが僕と木蓮を照らし、穏やかな時が流れる。

いつしか木蓮の枝が僕の血管と重なり、

木蓮は僕の一部になり、僕は木蓮の一部になった。

僕の中で永遠に散らない花……木蓮。 了